

奉祝 内親王殿下御生誕

御健やかなる御成長を御祈り申し上げます



「会員募集に向けて」

神道政治連盟京都府本部

副本部長 室田 一 樹

(岩屋神社禰宜)



自問自答しています

副本部長を拜命して半年が経過しました。幹事長の時には周年事業もあり、雑務に紛れて顧みることもなかったのですが、副本部長の重責を担い、あらためて神道政治連盟の使命と都道府県本部の役割を自問自答しています。

「神道精神を国政の基礎に」というとき、神道精神の神政連的表現は如何なるものか、国政にも申すとき、業界エゴでない主張とは何か？今一度確認すべき局面を、中央本部も、またわたし自身も迎えていることを痛感しています。

神道精神を国政の基礎にとは？

神職同士なら、あるいは信仰篤い総代さんとなら、神道精神は、「敬神崇祖が基本ですね。先祖まつりをしっかりやって氏神様にお参りしていれば、自ずからまことの道がひらけます。」といえは済むでしょう。でも、一般社会がそれを受け止めなくなっている、特に偏向したマスコミによる報道が、

求めている人に正しい形で伝えない現状は、森前首相の“神の国発言”が如実に示しました。

挨拶の全文を読みましたが、日本人の多くは、少なくとも小泉首相の支持率くらいには、この発言の要旨に賛同すると思います。しかし残念ながら森氏の真意は伝わりませんでした。「神道精神」を、たとえ偏向したマスコミを通じてであっても伝わる表現にして訴える責務が、われわれにはあります。

たとえば「夫婦別氏（姓）制導入の民法改正に反対する」ことは、神政連の喫緊の課題です。この問題をなぜ、神政連は取り上げなければならないのか、なぜこの問題に取り組むことが「神道精神の国政への反映」になるのか、考えてみましょう。

夫婦が選択的にせよ、別の姓を名乗ってよいとなると、いったいお墓はだれが守るのでしょうか。

それよりなにより死んだらだれのお墓に入るのでしょう。先祖まつりは神道に限らず日本人の精神のよりどころです。先祖まつりの習俗こそ、日本人の暮らしや道徳の基底にあるものです。夫婦が別姓を名乗り、徐々に先祖まつりが疎かになれば、「この国のかたち」(司馬遼太郎氏)は崩れてしまうでしょう。それだけでなく、もう相当にあやしいのですから。

また、先祖まつりは、子育ての場でもありますから、益々家庭教育はその拠り所を喪失してしまいます。家庭から神棚が、仏壇が、床柱が、囲炉裏や竈の浄火が消え去ったことと家庭の崩壊は、けっして無関係であるとは思えません。神道は、いえ日本人は言挙げしなかったかわりに、暮らしぶりに遠きみおや(祖先)の教えを込めて伝えてきました。

この例のように、神政連の活動は神社への利益誘導でもなく、業界エゴでもありません。日本の国のあるべき“かたち”を、具体的な国政上の問題に限定して求めているというのが、神道政治連盟の理念なのです。

どういう方法で国政にもの申す？

去る十一月五日、自由民主党本部において、会員一一八名の出席を得て、二年ぶりに神道政治連盟国会議員懇談会の総会が開催されました。今回は役員人事に大幅な梃子入れがありました。それはいうまでもなく、村上・小山両元議員の不祥事に端を発し、また、神の国発言に恐れをなした自己防衛のみの小心翼翼の議員が脱退したからです。しかしながらこれは、神政連の再生のために大変よい機会であったといえます。綿貫民輔会長自ら陣頭指揮をとり、幹事長に伊吹文明衆議院議員、事務局長に安部晋三衆議院議員、副幹事長には先の参議院比例代表選挙で神政連が推薦し当選を果たした櫻井新・尾辻秀久・有村治子三名の参議院議員が就任しました。

こうした人事から、従来の個人プレーを排し、組織としてわれわれの意見を汲み取り国政に反映する仕組みがより堅固になったことが窺えます。仄聞するところ、神政連からの働き掛けのみならず、時には政府自民党から、国議懇事務局を通じて意見が求められることもあるそうですから、私たちはいよいよ声を大にして訴えなければなりません。

国議懇にお願いしたことは？

神政連中央本部の幹事長であり、我が京都府本部田中恆清本部長は、この国議懇総会の席上において、宮崎会長と共に次の四点を訴え、理解と協力を求めました。

- ①戦死者追悼のための新施設構想に反対する
- ②夫婦別氏(姓)制導入の民法改正に反対する
- ③「みどりの日」を「昭和の日」に改める祝日法の改正
- ④憲法改正問題への具体的な取り組み

紙面の都合上、ひとつひとつを詳しく述べることは出来ませんが、ご覧頂ければいずれもが、「この国のかたち」の根幹に関わる重要な内容であることがご理解いただけると思います。

京都府本部のこれから

政治の場における最も強力な武器が“数”であることは、小泉首相の一連の姿勢に明かです。自民党最大派閥の橋本派に有無を言わせぬ力の源が高い国民の支持率であることは言うまでもありません。神道政治連盟が「あるべきこの国のかたち」を求めて国政の場に神道精神の反映を願うためには、やはり頼みとするのは会員数です。会員増強は発足以来の悲願ではありますが、こればかりは中央本部が直接行うことは出来ません。各都道府県本部の努力の積み重ねによってしか、会員は増えないのです。

京都府本部は他府県に先んじて創意工夫の活動を展開してまいりました。そうした会員への啓発事業は勿論今後も継承し発展させなければなりません。それと同時に、今一度初心に返り一丸となって会員増強に傾注しなければならないことは、充分ご理解いただけると思います。

アメリカにおける同時多発テロを機に、「日本国のかたち」がとても具体的に問われました。それは何もテロ撲滅に日本がどう貢献するのか、のみが問われたのではなく、難民支援や発展途上国への支援、京都議定書批准後の地球規模での環境問題への取り組みなど、日本の経済状況とともに、世界は我々が思っている以上に日本に注視しています。これはまさに国内外両面から我が国のアイデンティティが問われていると言えます。このような秋にこそ、「神道精神を国政の基礎に」の意味を再考し、再確認して、国会議員懇談会と一致協力して神道政治連盟の活動に邁進すべく、神職、総代諸氏をはじめ皆様方のご協力を切にお願いする次第でございます。

第15回会員大会講演録

あ、君国を背負う 覚悟はありや

工藤雪枝先生



— 講師略歴 —

昭和40年生まれ。東京大学法学部卒業。ロンドン大学経済大学院にて経済学修士号取得。外資系企業勤務を経て平成4年より「くらしの経済」(NHK)などのキャスターやBBC特派員などをつとめる。数多くのテレビ番組に出演、また雑誌や新聞にも執筆。

1 特攻隊に思う

1-1 特攻隊との出会い

ただ今ご紹介に与りました工藤雪枝でございます。今日はこの大会にお招き頂き、大変光栄に存じます。

今日のテーマは「あ、君国を背負う覚悟はありや」で、文語調のタイトルがついていますが、私自身のここ三、四年間の取材のテーマでもありません。大東亜戦争末期の特攻隊についてお話させて頂きたいと思っております。特別攻撃隊に関しましては、自分の宣伝になって恐縮ですが、七月二十五日に中央公論新社から「特攻へのレクイエム」という私の本が出版されました。原稿を書いている間も、テーマがテーマですから、生きるとか死ぬとはどういう事なのだろう、国のために戦って亡くなるとはどういう事なのだろう、と色々な事を考えて、本当に重たいと言いますか、辛いと言ってしまふと非常に英霊の方々に語弊がありますが、本当に大変な執筆でございました。

実は、私が特攻隊に対して興味を持ち始めたのは、二つほど理由があります。第一に、大変個人的な話で恐縮ですが、私はマスコミの仕事でNHKの番組ですとか「朝まで生テレビ」ですとか、早朝から深夜にわたるような番組をたくさん担当しておりました。朝の番組のために午前零時ごろからスタジオに入り、ずっと明け方まで交感神経を働かせていますので、本当に健康に良くないのです。また「ニュースステーション」といった番組にも出演しておりました。「朝まで生レ

ビ」をご覧になった方もいらっしゃると思いますが、交感神経をオンにして朝五時、六時くらいまで語り合うような番組ですので、そんな事をやっている間に体を壊してしまいました。ストレス性の厄介な病気で、外出も出来ない、電車に乗る事も出来ない、また食事採れないといったような感じで、一応生きてはいるのですが、社会生活が一切出来ないような状態になってしまいました。生きるためには食べていかなくてはいけませんから、一応仕事だけはやっていたのですが、本当に苦しい毎日を過ごしておりました。その時に、もうこんな風な毎日だったら何のために生きているのだろう、死んでしまったほうが楽になるのではないかと、別に自殺未遂をしたわけではないのですが、半ば本気でそういった事を考えた事がございました。

そのような時に、英霊のお導きという言葉が良く使われますが、神様のお導きだったのでしょうか、何かのご縁で、特攻隊の方々が遺された遺書、日記、そういった本をたまたま手にする事がございました。色々な遺書を読みながら、涙がポロポロ流れて仕方ありませんでした。と同時に私は何とくだらない事で、何と情けない事で生きる死ぬというような事を安易に考えたのだろうと、大変恥ずかしくなりました。それがまず私の特攻との最初の出会いです。それがちょうど今から五～六年前に遡ります。

第二に、これも個人的な話で恐縮なのですが、私の工藤家はもともと熊本県の出身で、先祖は細川藩の藩士をしておりまして、両親共々、あるいは親族共々、国のために何ができるのか、自分のためではなく公のために何ができるのかという事を常に考えなければいけないと、そういうような考えの親でございました。父は大学を卒業して、東映と防衛庁自衛官の両方の試験に受かりました。映画好きの父は、東映にもずいぶん行きたかったようなのですが、どちらが国のために社会のために働けるのかという事を考えて、自衛官になりました。もうすでにリタイアして晴耕雨読の毎日を送っていますが、そのような父の影響もあって、昔から戦史とか戦争とかに興味があったのではないかと思います。

ただ如何せん、日本で特攻隊とかそういう戦史の話をする、すぐ右翼であるとか変わった人とかに思われがちな風潮が、戦後はあると思います。国旗あるいは君が代に対するリアクションなども本当にひどいと思います。それに対して敬意を表

ただで右翼とかおかしいといわれてしまう。いってみれば世界の非常識が日本の常識、あるいは日本の常識が世界の非常識とでもいえるような構図があると思います。私はそれに対して警鐘を鳴らしていきたい、鳴らしていかなければならないという事も考えながらここ四～五年特攻隊のテーマに取り組んでいます。

ちょうど今年には真珠湾攻撃が始まって六十年、アメリカでは『パールハーバー』という映画が作られたようです。またサンフランシスコ講和条約が締結されて五十年になります。大東亜戦争が終わりまして五十何年になるわけですが、敗戦と共に日本の国土は焦土と化しました。でも著しい経済成長を遂げました。しかし私は、ずっと昭和に言われてきた「もはや戦後ではない」、そういう風な考え方は違うと思います。私の中ではまだ戦後は続いていると思います。それはなぜかといいますと、皆さんもよくお感じになるかと思いますが、本当に経済的に豊かにはなりましたが、過去の戦争の記憶を一切流し去ってしまって、新しい戦後民主主義と言わんばかりの価値観を作りました。同時に大東亜戦争はあくまでも過ちであって、その悪しき過去を日本の国という歴史からどんどん無くしてしまおうと、そういう思いで日本人は育ってきたと思います。しかしその過程の中で様々な価値観といいますか、国として持つべき、あるいは人間として持つべき精神的支柱を失ってしまったという感じが本当に致します。勿論戦前のいわゆる軍国主義的な面の日本というのは美化すべきではないという面も確かにありますけれども、戦争中には家族に対する思い、親を尊敬し、また最終的には天皇陛下や皇族の方々を尊敬し、またお年寄りを敬い、他人に対して気を使う、そういう風な素晴らしい精神性というのが確かに日本にはあったわけなのです。にも拘らず今この世の中を見ますと、最近の日本はどうなっているのだろうという位、殺伐とした実態がございます。皆さんの中にもこの数ヶ月の新聞の社会面を、もうここまで来たかという気持ちでご覧になった方が多いのではないのでしょうか。そういった理由から、私は特攻隊の精神を訴える本を書いたわけです。

1-2 特攻隊の精神

今日は、何が特攻隊の精神なのかという事をお話させて頂きたいと思っています。特攻隊というとすぐ右翼と言われがちですが、日本人の中の、歴史の中で確実にあった一つの現象として、日本人であれば一人一人がきちんと向き合って、一度

は人生の中で対峙してみるべき価値のある命題であり、歴史的事象だと思っています。勿論私のような若輩者よりも、ここにいらっしゃる皆様の方が色々な面でお詳しいかと思いますが、そのところはご了承いただきまして、今日の講演をお聴きいただければと思います。

そもそもこの特攻隊の作戦が始まったのは昭和十九年、一九四四年十月のフィリピンでの戦線をめぐっての事です。私は四月にフィリピンに行ってきた。マバラカットという、マニラから北に百キロくらい行った場所が、最初の四つの隊、特攻隊が出撃した場所ですが、そこにはフィリピンの町の人々が作った慰霊碑があるのです。今ではすっかりピナツボ火山の火山灰に埋もれてしまっていて、半分地中に入っています。それを見てぐっとくるものがありました。一步一步、特攻隊の慰霊碑に向かって歩いていくうちに、何か私の心の中で緊張感が高まってきました。お線香とお供え物をあげまして、富士山の裾野の水をペットボトルにいっぱいかけて差し上げたのです。ところが、さあっと水が火山灰に吸い込まれて、あっという間に乾いてしまいました。それを見ているうちに、特攻隊の方々の、英霊の魂がお気の毒な気が致しました。ピナツボ火山の灰に埋もれてしまっている、また富士山の裾野の水もあっという間に乾いてしまう、このような土地から発って行かれたのかと思うと、涙を禁じ得ないものがありました。

特攻には色々な方法がございます。一番有名なのは、飛行機に爆弾をつけて爆弾もろとも敵艦にぶつかっていく方法ですが、それ以外にも、人間魚雷というべき回天や、あるいは義烈空挺隊のように、敵地に飛行機ごと着陸してそこから敵に攻撃をかける作戦などがございます。すべての特攻の攻撃を通じて亡くなった方が凡そ七千名。その中でも一番多いのが航空特攻、いわゆる桜花と言う爆撃機も含めまして、爆弾もろとも散っていくというもので、四千六百十五名の方々が散華されました。

あちこちに資料館ですとか、慰霊碑とかがございますが、私が行った中でも印象に残っているのが、鹿児島県の知覧という町です。大変恐縮ですがこの中で知覧に行った事がおありの方、お手を上げて頂けますでしょうか。…すごいですね、私が特攻隊のお話をさせて頂いた中で、一番パーセンテージが高い集まりかもしれません。私も知覧に二年程前に参りました。特攻平和会館という会

館がございます。その中に数多くの遺影ですとか遺書が集められています。私が知覧を訪れたのは五月ぐらいで、五月晴れと形容するのが相応しい素晴らしい天気でした。五十何年前に、ここに特攻の基地があったと言う事が信じられない、本当にのどかな感じで、かえって涙が出てくると言いますか、悲しみが増幅される感じが致しました。また一人一人の遺影のもとに展示された遺書ですとか、数々の辞世の句を読んでいきますと、本当に涙を禁じ得ず、多くの方が目頭を拭いていらっしゃいました。

また私が印象に残ったものですが、その会館のすぐ横に三角兵舎という建物が再現されています。三角兵舎というのは、知覧から出撃された方々が最後の数日、人によってはもっと長く、過ごされた兵舎です。半分地下に埋まっています外からはちょうど屋根の部分しか見えない、それで三角兵舎と呼ばれていたのですが、そこに、特攻隊員の方々が寝泊りされていました。外から見ても非常に粗末な建物ですが、中に入っても中央にこういう風な通路がございます、その左右に皆さんが座っていらっしゃる椅子の半分くらいの幅の畳のようなものが高床式に出来ています。そこに毛布と藁布団、べちゃんこの煎餅布団と例えた方がいいのでしょうか、それが何十人分も並んでいまして、雑魚寝をしていたわけです。そういう風な粗末な兵舎で、一体彼らはどんな人生最後の時を過ごしたのだらうと考えますと、胸が切なくなるところがございます。風通しも大変悪く、雨が入ってくれば、置いていた靴がブカブカ浮いてしまうような粗末な兵舎の中で、そういう劣悪な環境の中で、一体死を目前にした隊員達は何を考え、どのように運命を捉え、また運命と向き合っていたのだらうという事を真剣に考えさせられました。

また私が非常に感銘を受けましたのは、その会館の中にあった遺影の数々です。大体十七歳から二十代前半の方々の写真ですけれども、本当に晩年の顔と言ってもいいくらいお顔が綺麗なのです。よく精神性というのは全部外に出てくると言います。これも大変卑近な例で比べるのも恐縮なのですが、私はテレビの仕事あるいはいわゆるジャーナリストとしてカメラに映されます。テレビのカメラであったり、あるいは普通のスチール写真で雑誌に取材される事もあるのですが、やはり自分の感情というのはごまかせないのですね。これはカメラマンの方も仰るのですが、どんなに笑顔を繕っても、どんなに苛々を隠そうとしても、必ず

カメラはそれを捉えます。それくらいカメラは正直であり、人間の感情はそんなに簡単に隠す事が出来ないものなのです。そういった前提でその遺影の数々や写真を見た時に、本当に彼らの表情の清々しさ、美しさ、また凛々しさというのはすごいと思いました。今の十七歳や二十代の初めの方々でこんなお顔をした方がいらっしゃるだろうか。あるいは十七歳二十歳を越えたとしても、晩年の方々でこういうお顔をした方がいらっしゃるだろうか。そう思うぐらい眼差しの優しさと背筋の伸びた凛とした雰囲気、とても十代や二十代とは思えない静謐とした面持ちがありました。逆に言えば、私はそれがとても悲しいと思いました。その慈愛に満ちた表情に至るまでに、どれだけの苦悩と、どれだけの死に対する覚悟の中で壮絶なる思考を経て、また如何に短い年月の中で人生を燃焼させ、与えられた時間を一生懸命生き抜いたか、だからこそこういう顔になったのだという事が逆に推察されて、本当に心に響くものがありました。そういった意味では、美しいと思うと同時にそこに至るまでの壮絶な苦しみが想われて、私自身胸が痛くなりました。

またこの度、自著「特攻へのレクイエム」執筆にあたって、色々な遺書や日記を読ませていただきました。遺影には晩年の悟りに達したような境地、まるで神のような素晴らしいすっきりとした顔で写っていらっしゃる方々ですが、日記や遺書を読みますと、生身の感情や人間性に溢れていて、例えば人生を捨てなければいけないという哀切の思い、自分達の死後に遺される家族達への別離の感情、愛情、そういった中で如何に悩み苦しんで、考え抜いた末に確実な死というものを受け止めるようになっていったかという片鱗が、色々伝わってきます。特攻隊員の方々の遺書とか手紙は、本当に一人一人読む人に対して、人間として生きるにあたっての命題を突きつけてくると言う感じがします。大体においてこの遺書や手紙には、人間としての感情が豊かに満ち満ちています。よくこういった遺書や手紙は、軍の検閲を経ているから格好いい事ばかり書いているのだと、間違った見方をする歴史家もいらっしゃるようですが、往々にしてそういった手紙や遺書は、例えば知覧であれば知覧高等女学校の生徒達等、特攻隊員の身の回りのお世話をしていた女生徒さん達に渡されていたりとか、また戦友の手を通して渡されていたりとか、軍の検閲を経ない形で送られている事が非常に多いのです。たとえ軍の検閲があったとし

ても、死を覚悟して死を超越した人々が書くそのような遺書には、検閲など恐れないという気迫といますか、本当の心情が溢れているような気がします。

もう一つ思いましたのは、そういった手紙や遺書が、非常に穏やかな悟りの境地、すなわち無欲な境地に達しているという事なのです。私などが十代や二十代だった頃を思い出しますと、やりたい事もいっぱいありましたし、人生に対して無限大の希望を持っていました。ですからどういう事を人生でしたいか、また生まれ変わってきたらどういう風になりたいかと聞かれたら、例えばこういう風になりたいとかいくらでも出て来たと思うのです。ところが特攻隊員の方々が残された日記や手紙には、生まれ変わったら例えば蛍になりたい、小鳥になりたい、生まれ変わったら草花になって世の中に帰って来たい、すでに悟りを開いていると言ふ一言で片付けてはいけないのかもしれませんが、見栄とか欲とか、後世の人に評価してもらいたいという変な欲から一切離れた境地に至っていらっしゃるという気がしました。

同時に痛いほど伝わってくるのが、「自分たちが身を挺して守ろうとしている祖国日本が、これからも美しい国、立派な国であって欲しい」、「後を頼みます、これからの日本を立派な国にしてください」という想いです。こうした表現は、何回も何回も色々な方の遺書から出てきます。果たして自分が今生きている国日本を考えた時に、それは精神性という事を含めて、亡くなった特攻隊員の魂に果たして応えているだろうか考えた時に、逆にとても辛い気持ちになります。そういった意味で、特攻隊はよく犠牲者だといわれますが、本当の意味で特攻隊を犠牲者に行っているのは、むしろ現代社会における我々のような気がします。つまり特攻隊の方たちは与えられた運命、その時に戦争があり、その時に若かったという事は抗えない運命であり、その中で精一杯生きて、その答えが立派に散華して行くという事だったと思います。そういう風に一生懸命生きた、ある意味では犠牲者ではなかったと私は思うのですが、戦後の日本では特攻隊があったという事さえも学校で教えられる、また国歌「君が代」、国旗あるいは靖國神社に対してちゃんとした敬意を払う事もできない、そういう国家、あるいは日本国民こそが、特攻隊のような英霊を犠牲者に行っているのではないかと思います。よく一部の歴史家が、「彼らは洗脳されていたから簡単に死ぬ事が出来たのだ」と言っ

いたりしますが、日記や遺書を読みますと、決して彼らはそうではなくて、むしろ生きとし生ける物への愛情が非常にあり、家族に対しての気遣いがあり、とても洗脳されていた人が書いたような遺書では決してないのです。如何に冷静に考えて分析して、自分たちの役割を果たしていったかという事がよくわかります。決して若気の至りとか、洗脳されたままで基地を飛び立っていったわけではないという事がわかる気がします。多くの立派な遺書があるなかで、こちらの遺書がいいとか、この遺書を取り上げて他を取り上げないというのも大変不遜な話ですが、せつかくですので、私の印象に残った遺書や日記を紹介させていただきます。

1-3 家族への優しさ

遺書の中で非常に多いのは、深い家族愛です。私など、同じ立場におかれたら、自分の事だけで精一杯なのではないか、自分の死の任務の事だけで頭がおかしくなってしまうのではないかという心境の中で、やはり家族の事を気遣い、まわりの人々の事を気遣い、最後までそういう方々の事を想って散華されています。

例えば佐藤新平少尉、享年二十三歳です。昭和二十年の四月十六日に出撃、戦死しておられますが、次のような手紙をご家族に遺しておられます。

「お父さん、お母さん、新平何一つとして思い残す事とてありません。ただお国のために立派に死ぬる喜びでいっぱいなのです。ただ一つ心配なのは、半年の間に二人の子供を失うお父さん、お母さんの事です。苦勞ばかりおかけしたお父さんお母さんに、これからはうんと親孝行しよう、いつも兄さんと言った言葉でした。実はこの間帰ったときも、ほぼ今度の事（特攻の事です）わかっていましたが、ついに言い出せませんでした。だがお父さんお母さん、新平は死んだとて、魂はいつまでもいつまでも生きています。兄さんと新平の魂はいつでもお父さんお母さんを見守っていますよ。軍隊に入ってお母さんにお会いしたのは三度ですね、一度は去年の休暇、二度目は去年の暮れ近く、館林まで来ていただいた時、あの時は新平嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。態々長い旅をリュックサックを背負って会いに来て下さったお母さんを見、何か言うと涙が出そうで、遂、わざわざ来なくても良かったのに等と、口では反対の事を言っただけで、申し訳ありませんでした。あの時お母さんと東京を歩いた思い出

は、極楽に行ってから、楽しいなつかしい思い出となる事でしょう。あの大きな鳥居のあった靖國神社へ今度新平が祀られるのですよ…。

手をつないでお参りしましたね。」

と、こういう風な日記です。本当に今の二十三歳の方で、こういう手紙を書ける方がどれ位いるのでしょうか。今の日本の事を考えると本当に殺伐とした印象をいただきます。しかし、そんな日本社会にも愛情溢れる手紙を皆が書く事が出来た時代があったのだなという風に思います。

またお母さんに遺した手紙をもう一通紹介させて下さい。この広田幸宣一飛曹は、昭和十九年の十月にフィリピンで散華されています。ですから非常に特攻の初期の頃に亡くなった方でいらっしゃるのですが、まだ内地にいらっしゃった頃、いわゆるフィリピンに出撃される前にお母さんに対して送った手紙です。

「拝啓 度々のお便り嬉しく拝見致しました。この前の便箋七枚の手紙を見ては、涙が止め処なく頬を伝わりました。何回も何回も繰り返して読みました。金送りましたがこんなに喜んで頂けるとは思いませんでした。神様などへ供えなくてもよろしいですからすぐ用立てて下さい。少しは金持ちらしくやって下さい。財布が底抜けにならぬ様、一ヶ月に一回は必ず補給します。私は貯金でこちらちゃんとやっていますから、送った金はじゃんじゃん使って下さい。みかん着いたそうで何よりです。出来たらもっと送りましょう。玉ちゃんにもお小遣いできるだけ送りますから、お嫁に行く日の貯金にして下さい。お母さんの書いてよこされた事も（これは面会という事のようにすけれども）、近いうちにあるかも知れません。今度金が自由になったら、ゆっくりと面会に来られないですか。やがては泊まりもありますし、二十四時間の休みもありますからゆっくり話も出来ますし、共に寝る事も出来るわけです。汽車は酔わねばよいのだがなあ。トランク要るなら送ってもよいです。ではお身体大切に。ベッドの中で懐かしい母上様、かあちゃんよ！」

という手紙です。特攻隊の方は、自分自身の死が迫っているにも拘らず、ここまでの愛情を家族に注ぎ、そしてまたそういう優しさを持っていた。この事が、今の世の中の人々が一度は対峙して、一度は特攻隊の事を知るべきだと私が思う一つの理由でもあります。

非常に私が口惜しいと思いますのは、私は先ほ

どのご紹介でもちょっとありましたが、イギリスにも住みましたしアメリカにも高校時代留学していました。大学院の時にはイギリスに住んでいました。元々特攻隊というのは「神風特攻隊」、「しんふう」と読んでいましたけれども、「カミカゼ」と言うクレイジーな事、馬鹿な事、狂信的な事という風に海外ではとられがちです。しかしはたして狂信的な人々が、このような遺書や手紙を書く事が出来たのでしょうか。私はそういった事も非常に口惜しいと思っただけで、日本には別に軍国主義だけがあったのではない、日本にしかなかったような素晴らしいレベルでの道徳とか、家族に対する思いやりとか、そういう事が戦時中もちゃんとあったのだという事を、私は是非近いうちに海外に伝えていきたいと思っています。自己宣伝のようになりますが、「特攻へのレクイエム」は、是非共英語にも翻訳して、世界中に、特にアメリカなどにカミカゼ、ハラキリ=クレイジーというそういう風な価値観しか持っていないアメリカに伝えていきたいと思っています。

次に、お子さんを想っての遺書を紹介致します。これは久野正信大尉、二十九歳がお書きになった遺書です。この方は義烈空挺隊の飛行隊で敵地に乗り込んで亡くなられましたので、戦死認定は昭和二十年六月十五日となっています。この遺書は五才の長男と二歳の長女へ宛てられています。まだ小さいお子さんですから、早く文字を習い読めるようにと、カタカナで書いてあります。

「正憲、紀代子へ。父ハ スガタコソミエザルモイツデモオマヘタチヲミテイル。ヨクカアサンノ イヒツケヲマモツテ オカアサンニシンパイヲカケナイヨウニシナサイ。ソシテ オオキクナツタレバ チブンノスキナミチニススミ リッパナニッポンデンニナルコトデス。ヒトノオトウサンヲ ウラヤンデハ イケマセンヨ。「マサノリ」「キヨコ」ノオトウサンハ カミサマニナツテ フタリヲヂットミテキマス。フタリナカヨクベンキョウヲシテ オカアサンノシゴトヲテツダイナサイ。オトウサンハ 「マサノリ」「キヨコ」ノ オウマニハ ナレマセンケレドモ フタリナカヨクシナサイヨ。オトウサンハ オホキナヂュウバクニノツテ テキヲゼンブヤツツケタ ゲンキナヒトデス。オトウサンニマケナイヒトニナツテ オトウサンノカタキヲウツテクダサイ。父ヨリ。マサノリ キヨコ フタリへ。」

という遺書です。

次は娘さんに宛てた遺書です。小さな娘さんで

まだ字が読めないので、将来お母さんに読んでもらって下さいという事で植村真久少尉が遺された遺書です。海軍予備学生で、昭和十九年の十月にフィリピン沖で特攻として出撃戦死されています。二十五歳でした。素子さんという愛児に遺した手紙です。

「素子は私の顔をよく見て笑いましたよ。私の腕の中で眠りもしましたし又御風呂と一緒に入った事もありました。素子が大きくなって私のことが知りたいときは、お前のお母さんか佳世子叔母様に私のことをよくお聞きなさい。私の写真帳も御前の為に家に残して在ります。素子と言ふ名前は私が付けたのです。素直な心やさしい思ひやりの深い人になる様にと、御父様が考へたのです。(中略)私は御前が大きくなって、立派な花嫁さんになって、幸になるまで見届けたいのですが、若し御前に私を見知らぬままにしてしまっても決して悲しんではなりません。御前が大きくなって、父に会ひたいときは九段(靖國神社ですね)へいらっしゃい。そして心に深く念ずれば、必ず御父様の顔がお前の心の中に浮かびますよ。父は御前は幸せ者と思ひます。生まれながらにして父に生写しだし、他の人々も素子ちゃんを見ると真久さんに会って居る様な気がすると良く申されて居た。又御前の御祖父様御祖母様は御前を唯一つの希望にして御前を御可愛がり下さるし、姉様も又御自分の全生涯をかけてただただ素子の幸せをのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一の事あるも、親無児などと思つてはなりません。父は常に素子の身辺を護つて居ります。先に言った如く素直な人に可愛がられるやさしい人になって下さい。お前が大きくなって私の事を考へ始めた時に、この便りを読んでもらひなさい。」

追伸がありまして、「素子が産まれた時オモチャにして居た人形は御父様が載いて自分の飛行機に御守り様として乗せて居ります。だから素子は御父様と一緒に居たわけです。素子が知らずに居ると困りますから教へてあげます。」という遺書です。こういう遺書を読んでいますと、本当に特攻隊の方々の亡くなった気持ちがいかばかり純粹で、なおかつ愛する人々を遺していく事が無念であったらうか、という事をつくづくと思ひます。それと同時に、彼らをクレイジーと言うような世代、あるいは外国、あるいは、そういった家族愛を忘れたような日本を許してはいけないう気持ち

を、強く感じます。

1-4 祖国への想い

今のように家族を思う気持ちですとか、母を思う気持ちに溢れた遺書もあれば、死生観を形成する難しさとか、祖国の将来を思う気持ちに溢れた遺書や手紙も沢山あります。本当に悩み苦しみながら、死ぬという事とはどういう事なのか考えていたと思ひます。

例えばこういうものがございます。この方は友達との会話で、「特攻隊というのは爆弾をかかえたただ一つの機械に過ぎないのではないか」という事を言われたのだと思ひます。それに対して、こういう風に日記に書いておられます。この方は昭和二十年の五月十一日に出撃戦死しておられます。

「空の特攻隊のパイロットは、ひとつの機械に過ぎぬとある友人が言った事は確かです。操縦桿を握る、操る機械。人格もなく感情もなく、勿論論理性もなく、ただ敵の航空母艦に向かって吸い付く磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬのです。理性を以て考えたなら、実に考えられぬ事でございます。如いて考え得れば、彼らが言う如く自殺者とでもいいまいしょうか、精神の国日本においてのみ見られる事だと思ひます。一機械である我等は何も言う権利もありませんが、ただ願わくは、愛する日本を偉大ならしめん事を、国民の方々に願ひするのみです。」

彼らもやっぱり本当に死ぬ事に対して対峙して、苦しみ苦しみ、自分の死生観を形成していったんだという事が、こういった日記からも伝わってきます。

こういう風な死生観に苦しむという気持ちを書いたものをもう一通ご紹介させて下さい。この方は昭和二十年の四月十二日に特攻戦死しておられます。柳生少尉という方です。

「一言に言うも、決して死生観はたやすく出来るものではない。ある程度の死生観は大君のために至誠の誠をいたし、祖国のために莞爾として散りゆくものには出来ているが、真の死生観は、その以降、すなわち死の寸前に出来るものなり。国のため親を忘れ、家もなく、将来の栄達元より望まず、ただただ一途に国のために軽き命を捨石となす事無上の光榮と覚え、そこに幸福を見出す時が導い心だと思ふ。また、斯くありたい。」

私は今回本を書くにあたって色々な遺書や日記を読ませていただきましたけれども、皆さんが愛する人々をものすごく大切に思い、愛する人々が

住む祖国日本が、素晴らしい国であって欲しいと思ひ、愛する人々が敵の空襲や敵の戦いから、一日でも早く安き日を得られるようにという事で、散華されていったと思います。こういう資料を読みますと、彼らが最後の最後まで自分の生の意味について考え、また肉親との別れを惜しみ、また同時に与えられた任務についてある種の無力感と戦いつつも、そうした感情を克服しようとした、もがき苦しんで出撃した、そういう軌跡が伝わってきます。写真を見ましても、特攻隊員の多くの方々が、自分の愛機に桜の枝をいっぱい積んで行ったり、またマスコット人形といって女学生たちが作った人形、痛みや苦しみの身代わりになってくれると言われていた人形をいっぱいつるして、飛び立って行きました。そういう桜とかマスコット人形を大切にしたいというの、彼らがいかに生というもの、すなわち生きるという事を大切に考えていたから、そういう風に愛着を感じたのではないかと、生きるという事を彼らほど、特攻隊員の方ほど真剣に大切に思ってた方はいないのではないかと思います。

実はこんな川柳もあるのです。正確な文言は忘れたのですが、当時は衛生状態が非常に悪く、飛行服に虱がついたこともあったようです。特攻隊員の方が飛行機に乗ろうとした時に、その虱がいた、その虱も一緒に連れて行くのはかわいそうだからと、整備兵のところへつかつかと走って行き、「これも一緒に連れて行くのは忍びない。もし良かったらこれも大切に可愛がってくれ」といって、虱を置いて行くと、そういう川柳もあります。彼らほどある意味で生を慈しむ心を持った人々はいなかったと思います。

1-5 生の証

いくつかの日記に表されているように、特攻隊員の方々はある死生観を形成するところまでのすごく悩まれたと思いますが、自分の生きた証、自分がこの世にあった価値というものを一生懸命見つけ出そうとした、その見つけ出した結果が、一種矛盾するようですが、敵艦に体当たりして死ぬ事であり、任務を遂行する事で、この世に生きた証を達成しようという風に考えていたと思います。ですから遺書とかを読んでいる限りではなかなかわかりませんが、敵艦にぶつかった時の写真—これはアメリカの方でかなり多くの写真が残されています—を見ると、いかに彼らが必死の思いで、自分の生の証がこの一瞬にあるのだ、この一瞬にかけるのだという気持ちで敵艦に当たって

たかという事がわかって、私自身その数千点に及ぶ写真を一枚一枚見ていく過程で、正に鬼気迫るといった思いが致しました。

基地を飛び立っていくと、だんだん別れのプロセスが進んでいきます。まず基地を飛び立つ前に家族と別れ、そしてまた基地を飛び立った瞬間に見送りの人々と、整備兵の人々と別れ、そしてまた編隊で、三機四機で行くわけですから、編隊で途中まで行きますが、敵機を発見する、あるいは敵機がいるところまで来た時に編隊は解散し、後は単独行動になります。たった一人の孤独な戦いがそこから始まるわけです。まだ日本の戦況が非常にいい時には、戦果を確認する直掩機（ちよくあんき）という飛行機がつき、誰々が何処どの空母に当たったとかを報告していました。やがて戦況が悪化するに従ってそれも不可能になりました。「我突入」という無電を特攻隊は打っていましたが、その無電さえも受信する事が少なくなりました。その結果どんな戦果を挙げたかという事は、推察の域を出なかったわけですが、私は、アメリカ軍が執拗なまでにたくさん撮った写真を見ているうちに、如何に彼らが勇敢に、ものすごい闘魂を込めた戦い方をしたかという事を知りびっくりしました。特攻隊の当り方というのは、超低空飛行でずっと飛んで来て、一回高度を上げてもう一回低空で艦に当る、これが一番有効な方法です。そうすると敵艦の舷に当る事が出来ますのでダメージが大きいのですが、もう一つの方法というのが、高高度でやって来て、高度四～五千メートルのところから、角度を決めて一気に急降下するのです。そもそも四十何度とか三十何度とかいう角度で急降下していきまると、日本の当時の戦闘機は軽く、また翼の面積は広くて割と浮くように出来ている。そういう風な戦闘機は浮こう浮こうとするわけですね、急降下なんかしてくれないわけです。急降下でスピードがだんだん高まってきましたと操縦がきかなくなっていきます。実際私が見た写真というのは、高度四～五千メートルから一気に降りてきているのですが、たとえば方向舵、左翼とか尾翼とか翼どかに被弾をしながら、それでも何とか旋回していこうとしているような写真。あるいは一気に急降下して行って、対空砲火をどんどん浴びながらも魂で操縦しているような、もしかしたらその時には、操縦席は火の海かも知れない、にも拘らず降りて行く。この延長線上には敵の艦があるという感じでただ一目散に、真一文字に降りて行く、急降下する、そんな写真もあ

りました。日本の飛行機は浮き上がりがちですから、そのためには渾身の力で操縦桿を押しなさいといけないのです。ものすごい力が必要だそうです。旧軍のパイロットの方にもずいぶん聞いたのですが、かなりの力で押さえないと急降下は出来なそうです。そういう風な写真がたくさん残されています。特攻隊の方々が自分の人生を賭けた渾身の操縦をする事によって、何とか、生きていた生に対してその価値を証明して、同時にこの世の中に生きていた意味を何とか結晶化しよう、何とか見つけ出そうとしていたような、そんな気持ちが伝わってきました。つまりあらゆる邪念を廃して、信念を結晶化させたこの闘魂の一瞬というのが、彼らにとっての敵艦突入の一瞬になったのではないかと思う様な写真が数々ありました。そこには明らかに、いわゆる命とか生に対する諦めではなくて、むしろ死をもってしか証明できない、死をもってしか実現できない確かな生の証というものが彼らにはあったのではないかと思いました。

本当に凄まじい事で、これまでの特攻隊の本とか資料を見てみますと、遺書とか日記を並べた段階で大体終わり、そういう戦場の残酷さとか悲惨さとか、彼らの戦いぶりはあまり知られていませんね。ところが実際に彼らの戦いぶりを見ると、鬼気迫る、凄まじい戦いを、強烈な気迫をもって行っていたのだという事を感じました。と同時にアメリカ軍が残した数々の写真の中には、ものすごい対空砲火で、一気に何十発とか、何千発という弾をぶつけられ、戦闘機は被弾をして海に無念にも落ちていった、そういう写真もいっぱい残されています。人生を賭けた目的を達成できなくて、その結果誰も看取る事のない孤独な、しかも悲壮な死があるわけです。そういった写真を見ますと、本当に深い悲しみを、ある意味で写真というリアリティ、リアリズムが冷酷に映し出されていて、燃え尽きていく最期の操縦士の叫びが聞こえてくるような、そういう感じも致しました。

私は、今の日本の人々がすべき事として、先程とちょっと重なりますが、敗戦直前という非常に追い詰められた状況のもとで、確実な死というものを任務として受け止めて、祖国に対する責任感の中で自分の命の断絶と、愛する人々との別離を見つめながらも何とか折り合いをつけていこうとしていた若者たち、そういった若者達の姿が、現代を生きる我々に与える啓示は非常に尊く重たいものだと思います。にもかかわらず大東亜戦争を侵略戦争と位置付けた上で、画一的に彼らの死を

犬死、無駄死とみなすという事はある意味で歴史の本質を見ていない人のみが出来た冒瀆行為だと思います。確かに日本は負けてしまったわけですから、特攻という作戦は単なる戦略とか戦術とか、あるいは用兵という観点で見ますと意味がなかったという見方も出来るかもしれませんが。それでも尚、特攻隊の隊員たちが身を挺して、また命を賭けて見せてくれた行為の意義は、日本人であれば誰でも考えなければいけない命題であると思います。と同時に、この命題を過去から連綿と続いている現在、過去、未来と言う時間軸の中に生きる日本国民に残した事によって、私は戦死した今も彼らの魂は決して犬死とか無駄死にはないと思います。ある意味で彼らの魂は、今もずっと現在に生き続けていると思います。そうした意味で、特攻だけではなくて、大東亜戦争に関して言えばすべての英霊の方々に同じような気持ちを持つべきだと思います。ただ私が特攻という事に取り組んでいますのは、これからの若い世代、今日本を背負っているような現代の方々に訴える題材としてわかりやすい、また確実なる死をどのようにして受け止めたかという意味において非常に多くのメッセージ性があるという事で取り上げて取材しているわけですし、決してそれは特攻以外の大東亜戦争中の他の戦いを軽視しているわけではありません。サイパン島もアッツ島も、あるいは硫黄島も、どこも本当に凄まじい戦いが行われて、多くの英霊が亡くなっておられます。ただ特攻隊の方の遺書と出会って、私自信が生きる勇気を頂けたという事と、特攻を知る事が平和の意味、国家の意味を考えるという事に繋がるとしますので、特攻のことを私自身がとりあげている訳です。

2 国家の意味を考える

2-1 戦後民主主義の弊害

しかし果たして現在、我々がそういった特攻の魂に込めているかということ、答えはやはりNO、違うと思います。実は先日、東京の靖国神社に参拝させて頂きましたら、回天といういわゆる人間魚雷の実物の上で飛び跳ねたりとかして遊んでいる十代の若者がいました。恐らく彼らは自分たちが足下にしてしている物体の意味を全くわかっていないと思うのです。東京なんか特にひどいと思いますが、街を歩くたびに目撃します若者達、現代人のマナーの悪さ、公衆道徳のなさ、また背筋を丸めていたら歩く様子、目の輝きのなさ、本当に

目に余りあるものがあると思います。特攻隊員の遺影の、同じ十七歳から二十何歳、若者と呼ばせて頂けるような年齢の方が到達していた精神性、その精神性が表れた顔と今の現代の若者の顔とは、雲泥の差があります。以前ヨーロッパに住んで帰ってきた時に思ったのですが、日本の若者ほど物質的に恵まれていて、ある意味で精神的に貧困な人々はいないと思います。例えばヨーロッパの若者と話をしてみても、やっぱりいい意味で青春している、いい意味で青いのですね。ですから話をしても、例えば自分の人生についてどう思うとか、自分の人生についてこういう風に考えていると言うような、哲学的な話がずいぶん出来たりします。けれども、日本の若者は、グッチのバックの話だのシャネルがどうのこうなの、高校生とか大学生がとてもそういうお金を持っているべきではないにも拘らず、そういう話しか出てこなかったりします。また最近増え続けています若者による犯罪、色々な凶悪犯罪が今年もありましたが、その理由の多く、動機の多くは一度殺人をしてみたかったから、あるいは有名になりたかったから、全く利己主義的な個人的な理由です。本当に最近の若者には、ミーイズムと言いますか、権利のみが横行していて、特攻隊の精神にあったように、自分の権利をワガママで主張するのではなく、国のためあるいは他の人々のために、公のために何が出来るだろうかを考えるという発想が本当になくなってしまったと思います。これはやっぱり戦後の教育に原因があると私は思うのです。私は昭和四十年生まれですから、日教組が正に教育を牛耳っていた頃に学校に行きました。大学も東大ですと国公立の学校に行っていました。父は職業柄転勤が多々ございましたので、色々な学校に参りました。その頃は気付かなかったのですが、今になっておかしいなあと思うのは、中学校の音楽の授業とかでモーツァルトの歌も歌うのですが、半分ぐらいショスタコビッチの歌とかを歌ったりするのです。いわゆる「目指せレニングラード」とか「ピオネール少年団の歌」とか、何で革命の歌を歌わなければいけないのかと思いつつも追従していたのですが、やっぱり日教組の教育というのが、確かに自分にもあったのだなという事を感じます。

また一度イギリス人ジャーナリストから言われたのですが、いわゆる朝日新聞や色々な新聞の主張を見ていると、日本という国を愛している、だからこそ批判するという批判と、日本という国家

を批判する、国家という概念を危ないものとして批判する、この二つは似て非なるものだという話を聞きまして、私もその通りだと思った事があります。いわゆる日本を愛しているがゆえに国という事をどうするのか、あるいはどういうふうな論調があるのかという判断と、国家というものがあってはけしからん、国家という概念が全くない方がいいんだという発想は、同じ批判でも全く違いますね。それが残念ながら横行してしまったのが戦後の日本の民主主義だと思います。もちろん戦前のように、義務だけに傾いた民主主義というのはどこか間違っているところがあると私も思いますが、現代のように権利だけを主張する、いわゆるミーイズム、自分だけがよければいいというような民主主義は、非常におかしいと思います。先日も東京の千代田線という地下鉄に乗っていましたが高校生が二人ほど乗ってきました。と同時に杖をついたおじいさんが乗ってこられました。普通の感覚でしたら杖をついたおじいさんに席を譲るのがもっともだと思うのですが、何を考えたかその高校生は、我先にと席を見つけて座るわけです。結局おじいさんは座れなかったのですよ、杖をついているにも拘らず。すると彼女らはピンを出して、ピッと留めまして、いきなりお化粧を始めたのです。だから座りたかったのですね。それを見て、世も末だと思いました。何にも考えていない。公と私、公私混同とよく言われますけれども、パブリック、いわゆる国のために社会のために、国家のためという発想と、自分のためという発想とが全く逆転してしまっていて、自分のためという発想で生きている人がいっぱいいるのではないのでしょうか。

私の父は自衛官でした。両親はかねがね私の躰に失敗したと言っておりますが(笑)、私が有難いなと思っただけなのは、両親がそこで権利と義務、何を言う権利があって、何をしなければいけない義務があるのかちゃんと教えてくれた事だと思います。卑近な話になりますが、私が小さい頃にある料理を食べたくないと言うと、父はこう言ったのです。「お前にはそんな事を言う権利はない。お前はまだ子供で養って貰っている身だ。だからもしそういう風に食べ物の好き嫌いを言うのだったらちゃんと自分で稼げるようになってから言え。自分の家を出て、自分で生計を立てるようになってから言う権利がある。それまではそんな事を言う権利はない」と。私も社会人になって初めてお給料をもらって、アイスクリームなど買いに行っ

た時には大変嬉しゅうございました(笑)。またそれ以外にも、例えば父が好きだった故ジョン・F・ケネディ大統領の言葉ですが「自分が国家のために何が出来るか考えろ」と。国家が自分のために何をしてくれるかではなくて自分が国家のために社会のために何をしてあげられるのかを問えという、ジョン・F・ケネディ大統領の就任演説の中の言葉をよく聞かされました。そういう風な事から、私自身も、何かあれば国のためにとか、公のために何が出来るのかというのがひとつの行動の指針になっているのですが、私のような考え方がどんどん少なくなっているのではないかという事を、今の日本を見ていて思います。あれほど特攻隊員の方達が一生懸命守ろうとした日本という祖国、そして「愛する日本を偉大ならしめんことを国民の方々にお願ひするのみです」と、はっきり遺書に書いて、多くの方が「後を頼む」とにっこり笑って散華していかれました。そういう託しを、私たちは実現していないと思います。もし命を捧げて亡くなった方々が生き返って、今の日本社会を見る事が出来たら、果たして特攻隊員の方たちは自分たちの死を正当化できるだろうか。私は本当に思います。勿論亡くなってしまった方の言葉を今はもう聞く事は出来ません。ただ特攻の歴史を調べる過程で、遺書や手紙を読んでいて、また敵艦に突入していく凄まじい写真を見ていて、本当に彼らの、現代日本を嘆く声が聞こえてくるような錯覚さえ持ちました。

そんな中で我々はどういう風に特攻隊の魂に込められた理想をいくのだからかという事をこれから考えていかなければいけないと思います。特攻隊の魂に込められた理想は、言ってみれば、家族愛、あるいは国家に対する義務を考えていく事だと思っています。特攻隊の方々の魂を犠牲にするかしないかは、今も進行中のプロセスであって、彼らの死を無駄にするかしないかは我々にかかっている、そういう責任を我々が持っているような気が致します。

では具体的に何をすべきなのでしょう。第一に、日本の社会は過去・現在・未来と連綿と歴史の軸の上に続いていると意識することです。最近の政治家を見てみると、中国とか韓国とかに戦争責任を問われればすぐ事実も確認する事なく謝り、あたかも過去に悪い事をした、でも今の日本は過去に悪い事をした日本とは違うのだと主張しているように思えます。本当に悪い事をしたと言いつついいのでしょうか、ちゃんと歴史の事実

を調べて下さいと私は言いたいのです。そういう風な政治家がいるという事自体が情けないなと思います。対外的な事ですが、今年の夏に『パールハーバー』と言う映画が日本でも公開されるようです。これは今アメリカで公開されて、大々的に人気を得ているようですが、真珠湾の事を描いた映画です。如何に日本がひどい攻撃をしたかという事が、四十五分間くらいにわたってかなり執拗に出てくるようなのです。私は二年程前からこの映画が作られると言う事を聞きまして、何か大丈夫かなあと戦々恐々という感じで思っていたのですが、プロパガンダと言いますか、映画製作の背後に動いている何かがあるのではないかと感じたりします。

また皆さんもご存知でしょうが、南京大虐殺に関するアイリス・チャンの『THE RAPE OF NANGKING』という、アメリカで五十万部売れた本があります。本当に写真も修正加工し、かなり減茶苦茶な本です。私もアメリカに度々取材などで行くのですが、その本が五十万部売れた事によって、あなたたちは南京大虐殺とかパールハーバーとか酷い事をやっただろうと言われてたりする事が本当にあるのです。私はその度に、アメリカ人は何も知らないのね、と思います。例えば真珠湾攻撃にしても、外務省が宣戦布告の文章を用意していたにも拘らず、タイプを打つのが間に合わなくて結局開戦後数時間後に渡すような結果になってしまった事、それは奇襲攻撃という、不意打ちは意図したものではなかった事、あるいはまたルーズベルトは暗号を既に解読していて、結局ハワイを切り捨てた。そういうような事もアメリカ人は何も知りませんから、ちゃんと教えてあげようと思うのです。如何せん一人に対して『パールハーバー』のような映画の力というのは大きいですが、対抗していかなければいけない。正しい歴史をまず日本人が持たなければいけない、と同時に、日本という国が、日本が持っていた精神性、日本が過去に持っていた道徳観をもっともっと大切に継承していくべきではないかと思えます。

もう一つ思いますのは、「平和はいわゆる安住する港ではなく、これは自分で進路を描いていく航海である。」という言葉がありますように、平和な社会は自動的に受動的に出来上がってくるものではなくて、自分たちで作らなければならない。民主主義国家という事を考えた時に、やはり国民の一人一人がそれを作り上げていく義務があると思

ます。勿論民主主義国家に権利はあるわけですが、権利と同等に比例して義務というものも国民ひとりひとりが持っていると思います。ところが、戦後民主主義においては、特に全共闘世代といってしまうと失礼かもしれませんが、そういう人々が戦後民主主義＝自分の自由に好きな事をやる事だ、自分が好きなようにやれば民主主義なのだ、という風に言う事によって、非常におかしな事になってしまったと思います。十七歳の女性をお子さんにもった知人がいるのですが、その十七歳のお子さんが、土・日曜日の度に学校仲間が集まって自宅にやってきて、「朝まで生テレビ」よろしく、カン耐ハイを片手に一晩中語り合うのだそうです。高校生、しかも未成年がお酒片手に人の家に集まって、男女一緒に朝まで語り合うというのは不謹慎な気がします。そのお父さんに、「そういう風な時にお父さんは一体どうされるのですか」、「出ていけと仰るのですか」と聞いたところ、そうではなくて、一応子供のために「ようこそいらっしゃい。入ってもいい?」とか言って、差し入れをするのだそうです。「差し入れされるのですか」って聞いたら、「でも娘が、パンが恥ずかしいから出てくるのやめて」と言うので、「ごめんね」とか言って立ち去るのだそうです(笑)。私はそれを聞いてやはり教育というのはとてもそういう事では出来ないなと思いました。家族というのは縦の関係がまず基本で、それがあって初めて教育が出来ると思いますし、それがまったく崩れてしまったのが戦後民主主義の社会。それ故にみんな野放図にミーイズムで自由ばかりを主張するようになってしまったと思います。

2-2 国家観を失った日本人

そういった意味では、国歌「君が代」ですとか、国旗に対する対応を見る限りでも、国家という概念も否定してしまっていると思います。国家というのは義務を課すものだから怖い存在として、国家という概念を否定してしまっているのが戦後の民主主義だったと思います。ところが世界中を見たところ、如何に平和で幸せな民主主義の国々が少ないか、例えば旧ユーゴの内戦がありましたけれども、私もイギリスに住んでいたときに、友人が旧ユーゴの国々の人々だったりして、ずいぶんと悲惨な目にあった人々がたくさんいます。またルワンダの内戦然り、また第二次大戦中にユダヤ人が舐めた辛酸の数々、本当に国家を持たない国民の悲劇、悲惨さというのはとんでもない、酷いものがあります。日本人であればまず国に感

謝し、また感謝をすると同時にそれを守っていくためには、社会人としてあるいは日本人として何をしていくべきなのか、平和を守るという事だけではなくて、精神的にも誇り高い素晴らしい国であってほしい、そういった特攻隊の願いをかなえる国にするにはどうしたらいいのか、それを考えていかなければいけないと思います。言ってみれば民主主義においては国民が国家を作り、また国家が国民を守るという相互の関係があるわけですから、相互のギブアンドテイクと言う関係にあると思います。その中で、自らの義務に従って努力をしない国民にはその程度の国家しか与えられない、それに相応しいレベルの低い国家しか与えられないという事を肝に銘ずべきだと思います。日の丸・君が代に関して思いますのは、日本人ほど国家という概念が頭にないボケた国民はないと思うのです。例に出して大変恐縮なのですが、先だっで行われました長野オリンピックでモーグルの競技で優勝した選手は、国旗が掲揚される時に最後まで帽子をとりませんでした。これは、日本の国の国旗に対して失礼なだけでなく、国際的な儀典上、マナー上は他の銀メダル、銅メダルをとった国々の国旗に対しても失礼な事なのです。そういった事も戦後の民主主義の日本の教育では教えられずに育ってしまった人が本当にたくさんいるという事だと思います。

また日本が君が代や日の丸を大切にしない、つまり国家という事を大切にしていなかった例としても一つ思い出すのは、父が元自衛官だったという事で多少の自衛官びいきもあるのかもしれませんが、一昨年十一月、埼玉県入間市の入間基地所属のT33という練習機が送電線に激突して墜落した事故がありました。これはエンジンが不調になって、最終的に緊急脱出しなければいけなくなったのですが、その真下を見ると民家や学校が密集している。このままバールアウトをして緊急脱出したら多くの人々が亡くなってしまいます。そう考えて最後の最後までバールアウトせずに操縦した結果、一回目にバールアウトと叫んでから十三秒間操縦を続け、結果として送電線に引っかかって、その時にはバールアウトをするための高度、速度がなくなっていて殉職されたわけです。ところが日本のマスコミの見出しは、「八十万世帯が停電、停電に弱い都市機能」という類がほとんどでした。自分の命を落としても住民を、他の人々の命を守るという行為は大変尊いと思います。ところが国家という概念をなくしたマスコミはその尊

さがわからないわけです。私もマスコミの中において思いますけれども、そういったところは私がやっています産経新聞の連載や、中央公論や文芸春秋等の執筆の中でも書いているところですが、本当にわからないわけですね。頭がボケてしまっている、国家という意味において。ですから停電という事しか頭に浮かばないわけです。恐らく同じような事がアメリカやイギリスで起こったら、この方たちは確実に勲章ものだったでしょう。同時にマスコミの中でも非常に称えられた事でしょう。ところが今年、山手線の新大久保駅で一人がホームに落ち、助けようとした二人の方が可哀想な事に電車にはねられて三人亡くなってしまった時に、すごく犠牲的な行為、英雄的な行為という事で、新聞、メディアが本当に称えました。私も感動致しました。ただこの両者を比較してみた場合、やはり国家という概念がないからこそ、こういうふうな事になるのだなあと思いました。すなわちT33のように他の人々を救うために命を落としたという事はわからない、国家という概念がないから。ところが新大久保駅の事故は、他の人を救うという、個人対個人ですから、わかりやすいですね。それに関しては素晴らしいと、ある意味で過剰なまでと言ってしまおうと亡くなった方に大変失礼ですけども、マスコミが騒ぎ立てる。それは日本の戦後の民主主義を象徴した話だなと思いました。

2-3 義務、名誉、祖国

最後に一言、あるフレーズをご紹介して講演を終わらせて頂きたいと思います。これは奇しくも日本を占領していましたダグラス・マッカーサーが、ウェストポイントというアメリカの士官学校で言った言葉であり、尚且つ今でもアメリカやイギリスの多くの政治家が引用する言葉ですが、「DUTY—HONOUR—COUNTRY」という言葉があります。DUTYは義務とか貢献、HONOURは名誉、そしてCOUNTRYは祖国です。英語で国家という時には二つの言葉がありまして、主権国家という時にはNATIONと言う言葉を使います。そしてマザーカントリーと言いますか、わが祖国、という時にはCOUNTRYと言う言葉を使います。ここで言われているのは、色々な解釈がございいますが、まず国家のためにあるいは国家の精神性を高めるために努力をするという事は、まず名誉が与えられなければならない、と同時にその名誉ある行為を通して初めてCOUNTRYという概念が成り立つのだという、

そういう言葉です。ですから先程のT33の練習機の事故で言いましたら、DUTYに対してHONOURが与えられなかった典型的な例だと思います。

私たちが民主主義社会である日本、崇高な精神性・レベルの高い品性を持った日本をこれから実現して行かなければいけない。特に今の日本を見ていますと、このまま行くとだんだん、飛行機に例えれば海に墜落していくようなそういう実態にある、もう本当にここまで来てしまったかと思えます。我々一人一人が「DUTY—HONOUR—COUNTRY」というようなところでの、わが祖国日本に対して何ができるのか一人一人国民が考えていく事によって初めて国というものがよくなっていくのだと思います。今のように若い人なんかを見てみますと、自分さえよければいいというような考え方の人が非常に増えていると思えます。総務庁のとあるデータでも、国民の利益全体と自分にとっての利益とどちらが大切かというデータを昭和四十三年からとっているのですが、一貫して国民全体の利益が大切と言う数字がずっと下がってきて、今は大体三十%くらい、一方で個人の利益が重要であるという数字は一貫してずっと上がっているのです。これは昭和四十四年からずっと同じ傾向ですから、確実にそういうミイズムが日本に蔓延してきていると思えます。これもご存知の方が多いと思いますが、日本は憲法前文においてこう謳っています。「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。…日本国民は、国家の名誉にかけ全力を挙げてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。」正にこの「DUTY—HONOUR—COUNTRY」という事を実現すると誓っているわけです。そういう風な国民である私たちがすべき事は、国とか公のために、そのような義務を国民全体が有していると言う事を自覚した上で、特攻隊の精神のようにみんなが体当たりするというような事ではないにしても、彼らが持っていたところの、あるいは昔の日本人が持っていたところの家族に対する愛情、情感、また自分自身の事だけを考えない、国家や他の人々の事を考えるという発想の器の大きさ、そういった事を今ここで改めて考えてみるべき実態が、今の日本にあるような気がします。

以上で私の拙い話を終わらせて頂きます。今日は長い間ご静聴有難うございました。

今こそ

女性のちからを！



神道政治連盟京都府本部

事務局長 堀川 博 史

(石清水八幡宮権禰宜)

一連のいわゆる教科書問題は、「新しい歴史教科書をつくる会」の惨敗という結果で一応の終息をみた。「惨敗」と表現しても決して言い過ぎではないであろう。結果として「新しい歴史教科書」と「新しい公民教科書」の採択率は目標の10%に遠く及ばぬ0.03%（生徒1万人に3冊）に終わってしまった。採択前の世論調査や、つくる会側が把握していた各自自治体教育委員会の情報からの採択率予想を見事に裏切る結果となってしまったからである。この敗北には、それこそ近隣国の不当で執拗な内政干渉を始め、それを意図的に導いたマスコミによる不正な偏向報道や、市民運動と称する反対派の露骨な妨害工作など、数えればキリがないくらい多様な不正要因があり、また逆につくる会側の作戦ミスというか、世論の昂まりを上手くこちら側に動かし切れなかったという反省も出てこよう。つくる会では様々な角度からその分析をまとめておられるが、この結果は結果として率直に受け止めた上で、今最も大切なことは、今回の敗北をいかに五年後の次回採択に結びつけるかであり、われわれつくる会側の応援団も、反省すべきは素直に反省し、早急に対策を練らねばならない。このまま「ああ残念でした」でこの世論の昂まりを冷却させてはならないのである。

しかしながら、顧みるに我々京都の神政連は今回の一連の採択推進運動の中で、いったい何を成し得たのだろうか。具体的な活動は僅かに勉強会を開催したのみで、声はすれども姿は見えず、地元京都においてでさえ、つくる会の教科書採択をすすめる有効な手だてを、果たして打つ事が出来

たのかという思いが大きくなるのである。

今回の採択に備え何をすべきか。これについては向後府本部内で議論を重ね、同じ轍を踏まぬよう早急に我々の出来る事、為すべき事を真剣に考えて行かねばならないが、先ずは一から正しい教科書の普及周知を進める、草の根的な運動が必要となるであろう。そこで、その運動の担い手として今女性が急速に脚光を浴びつつあるのである。

現在中央本部では、先般の会員大会でもご講演（前項掲載）戴いたジャーナリスト工藤雪枝氏をはじめ、各界の著名な女性方に参加を求め、「心の教育・女性フォーラム」を立ち上げ、運動の裾野を女性に拡大する計画を進めている。それに先駆け、我々京都府本部では、去る平成十一年に「京都の躰を語る女性の会」を結成し、伝統文化を見直し正しい日本精神を育てる活動の実績を既に着実に重ねている。

なぜ今女性なのかと言うことは、これまたそれぞれに思うところもあり様々な分野から期待が寄せられるところであろうが、その一つには、家庭において次代を担う子供達への多大な影響力と、教育の現場でPTAとして学校や教師と最も直接的に関わっておられることが挙げられよう。今後は、これらの女性組織と緊密に連携しつつ、常に活動の中で教育正常化を意識し、教科書問題を話題としていきたい。一人でも多くの母親が、また将来母となる女性が、今までの荒唐無稽な教科書の嘘・間違いに気づき、「新しい歴史教科書」を手に取り、とても良い教科書だと理解してもらえよう、様々な機会を設けていきたいと思うのである。

再燃しつつある夫婦別姓制問題も然りである。この問題こそ、当の女性側から「絶対反対」の狼煙をあげてもらわねばならない。

今こそ、これまで以上に女性の力に大きな期待が寄せられる、そんな時代となってきたのである。

—事務局だより—

◇会務・事業報告(平成13年6月27日以降)
平成13年

- 6月27日(休) 京都府本部役員「教科書問題研修会」開催
24名出席 於京都府神社会館
- 6月30日(出) 京都の婁を語る女性の会催し
於石清水八幡宮
- 7月18日(休) 神政連中央本部四役会 田中幹事長出席
於山口県
- 7月19日(休) 京都府神社庁第1回関係団体代表者懇話会
田中本部長以下出席 於京都府神社会館
- 7月28日(出) 中支部総代会総会 室田副本部長出席
於金刀比羅神社会館
- 8月4日(出) 全国氏子青年協議会第39回定期大会 田中本
部長参列 於都ホテル
- 8月6日(月) 本社本庁・神政連中央本部幹部連絡会 田中
幹事長出席 於本社本庁
- 8月7日(火) 自民党町村副幹事長に首相靖国神社参拝問題
にて面談 田中幹事長出席 於自民党本部
- " 安倍内閣官房副長官に首相靖国神社参拝問題
にて面談 田中幹事長出席 於首相官邸
- 8月8日(休) 神政連国会議員懇談会幹部会 田中幹事長出
席 於赤坂プリンスホテル
- 8月13日(月) 中外日報首相靖国神社参拝の件にて取材 田
中本部長
- 8月15日(休) 神政連中央本部靖国神社参拝 田中幹事長参
列
- 8月19日(日) 京都府本部役員会 田中本部長以下14名出席
於北野天満宮
- " 京都府本部役員・委員懇親会 田中本部長以
下14名出席 於豊しげ
- 8月20日(月) 中外日報首相靖国神社参拝の件にて取材(第
2回目) 田中本部長
- 8月21日(火) 第17回神政連東北六県情報交換会 田中幹事
長出席 於山形県
- 8月22日(休) 「ほしのでんごん」埼玉県コンサート 田中
幹事長出席 於埼玉県
- 8月29日(休) 神政連中央本部 森前首相と面談 田中幹事
長出席 於東京都
- 9月3日(月) 神政連愛知県本部総会 田中幹事長出席
於名古屋
- 9月10日(月) 京都府本部監査委員会 田中本部長・赤木委
員長以下出席 於平安神宮
- 9月13日(休) 教育正常化キャンペーン打合せ 室田副本部
長以下出席 於豊国神社
- 9月19日(休) 神政連中央本部四役会・監査会・役員会 田
中幹事長出席 於本社本庁
- 9月21日(金) 京都府本部代議員会開催 田中本部長以下56
名出席 於京都府神社会館
- 9月24日(月) 京都府神社庁交通慰霊祭 田中本部長参列
於石清水八幡宮
- " 山城四支部連合会総会 田中本部長出席
於石清水八幡宮
- 9月27日(休) 京都府本部創立30周年記念誌座談会開催 田
中本部長以下出席 於八坂神社
- " 竹内幸平前事務局長尊父葬儀 室田副本部長
参列 於草津市
- 9月29日(出) 教育正常化キャンペーン打合せ 室田副本部

- 長以下出席 於北野天満宮
上支部総代会総会 室田副本部長
於ホテルフジタ京都
- 10月3日(休) 京都府神社庁神宮大麻曆頒布始式 田中本
部長参列 於京都府神社会館
- " 清政第31号編集会議開催 室田副本部長以下
出席 於京都府神社会館
- 10月11日(休) 神政連国会議員懇談会総会 田中幹事長出席
於自民党本部
- 10月22日(月) 神政連中央本部四役会 田中幹事長出席
於本社本庁
- " 初詣等神社行事の暴走族等妨害行為抑止の件
にて村井国家公安委員長と面談 田中幹事長
出席 於国家公安委員長室
- 10月24日(休) 京都府神社庁設立55周年京都府神社総代会
設立45周年記念大会 田中本部長参列
於都ホテル
- 10月29日(月) 府内選出国會議員に対し、夫婦別姓制導入に
関するアンケート調査実施
- 10月30日(火) 日本会議・京都 正副運営委員長・事務局・
専門委員会 於平宮神宮
- 11月4日(日) 相楽支部総代研修総会 室田副本部長出席
於笠置温泉笠置館
- 11月6日(火) 京都府本部三役会 田中本部長以下出席
於京都府神社会館
- 11月9日(金) 京都の婁を語る女性の会催し 於(株)井筒
11月10日(出) 自民党京都府連政経文化懇談会
於リーガロイヤルホテル京都
- 11月15日(休) 神政連近畿地区協議会事務引継会 田中本
部長 堀川事務局長出席 於大阪府神社庁
- 11月17日(出) 京都府神社庁新嘗祭 田中本部長参列
於京都府神社庁
- 11月18日(日) 日本会議・京都 研修会参加
於平安神宮記念殿
- 11月24日(出) 皇孫殿下御誕生に際して国旗掲揚及び記帳所
開設の要望書を京都府知事及び府會議員宛て
提出
- 11月28日(休) 府内選出国會議員に対し、自民党法務部に
出席の上夫婦別姓制反対表明依頼
- 12月1日(出) 京都府神社庁関係団体代表者懇話会 田中本
部長以下出席 於首途八幡宮・烏岩楼
- 12月2日(日) 京都府本部役員会開催 田中本部長以下出席
於北野天満宮
- " 京都府本部役員・委員懇親会 田中本部長以
下出席 於豊しげ
- 12月11日(火) 神政連大阪府本部設立30周年記念式典 田中
本部長参列 於メルパルクホール
- " 神政連大阪府本部「金子みすずコンサート」
田中本部長以下3名出席
於メルパルクホール
- 12月12日(休) 国民精神昂揚研修会・神政連時局講演会開催
於京都府神社会館
(事務局長 堀川博史)

発行日 平成13年12月12日(第31号)
 発行者 神道政治連盟京都府本部
 〒616-0022 京都市西京区嵐山朝月町68-8(京都府神社庁内)
 TEL 075-863-6677